ウィトゲンシュタインの治療の弁証論的構造

The *Dialectics* of Wittgenstein's Therapy

吉田 廉（Ren Yoshida）

東京大学（The University of Tokyo）

aglossian@icloud.com

ウィトゲンシュタインは 1944 年の秋学期に、アンスコムを含む学生たちに講義を行った。ウィリアム・ジェームズの『心理学原理』をテクストとする案を彼が考えていたことからもわかるように、この講義の主題は心理学の哲学であり、実際に扱われたのは後に出版された『哲学探究』 §§189–421 に概ね相当する議論であった (Klagge 2019, 53)。アンスコムは後年、この講義において自分がウィトゲンシュタインによって「治療」された経験について語っている。アンスコムが治療を必要としていたのは、感覚の主観性に関するある描像である。

目の前に赤い椅子があるとしよう。私は目の前の赤い椅子を見ている。しかし、私が本当に見ているものはなんだろうか。私に見えているものに裏側があるとどうしてわかるのだろうか。「私は赤い拡がりを見ている」という以上のことがどうして言えるのだろうか。もし現象主義が正しければ、本当に見えているのは視覚に固有の対象である色の拡がりであって、その色知覚から推論された赤い椅子ではない、と主張できるだろう。しかし、アンスコムはこうした答えには納得できなかった。一方で、アンスコムは日常言語学派が擁護したような、我々は赤い椅子を直接見ているのだという常識にも帰着できずにいた (Anscombe 1981, viii)。

ウィトゲンシュタインの治療は「痛み」という語と色語の用法の比較によって、このジレンマを解消するものであった。このジレンマは後に彼女の論文「感覚の志向性——文法的特徴」(Anscombe 1965) において、そのまま再現されており、他の多くの論文にもその治療の痕跡を認めることができる。そして、彼女の議論からは、彼女がどのような哲学的立場をどのような理由で退けたのかを比較的明確に見て取ることができる。にもかかわらず、最終的にどのような哲学的立場が採用されたのかを、彼女が書いたものから理解することは極めて難しい。この難しさは、次の問いの難しさと同じものである。すなわち、ウィトゲンシュタインの治療は最終的に何を達成したのだろうか？　本発表はこの問いに答えることを目的とする。

本発表ではアンスコムの議論からウィトゲンシュタインの治療の痕跡が認められる二つの議論、すなわち、「知覚」と「魂の不死性」に関する議論をそれぞれ取り上げ、その弁証論的構造を明らかにすることで、この問いに取り組む。彼女の議論の構造を私が弁証論的構造と呼ぶのは、ある問題に関して、テーゼとアンチテーゼを立て、この対立

を可能ならしめている、我々が固着しているある描像を明らかにすることを目的とするからである。まずは「知覚」の議論に関してその構造を明らかにし、これと同型の議論である「魂の不死性」に関するアンスコムの議論をカント『純粋理性批判』の第三誤謬推理の議論と対照させることで、彼女の議論の弁証論的構造を明示する。それは取りも直さず、ウィトゲンシュタインの治療そのものに含まれていた弁証論的構造である。

Anscombe, G. E. M. (1965) "The Intentionality of Sensation. A Grammatical Feature," in Butler, R. J. (ed.), *Analytical Philosophy - Second Series*, Blackwell, pp. 158–180, reprinted in *Metaphysics and the Philosophy of Mind*, Blackwell, 1981, pp. 3–20.

——. (1981), *Metaphysics and the Philosophy of Mind*, Basil Blackwell.

Klagge, James C. (2019) "The Wittgenstein Lectures, Revisited," *Nordic Wittgenstein Review* 8 (1-2), pp. 11–82.